

陽光きらめくスロベニアで紙芝居について語り合う 永瀬比奈

事務局にスロベニアから一通のメールが舞い込んだのは、二〇一五年五月のことでした。スロベニアで「紙芝居の父」と呼ばれているイゴールさんから、妻のイエレナさんと近々東京に行くから、紙芝居関係者にぜひ会いたい、というものでした。人形劇団の主宰者でもあるおふたりは、二年ほど前からスロベニアで紙芝居を広めはじめ、それが大きなうねりになっているというのです。

わたしはすぐに海外統括委員の野坂悦子さんに相談し、ご夫妻を童心社に案内する手配をしました。六月初めにお会いしたおふたりは、大きな声でよく笑う人たちでした。わたしたちが話す紙芝居の理論に真剣に耳を傾け、たくさんの紙芝居を買って帰られました。

その後、イゴールさんたちのおかげで、スロベニアからの新入会員がとも増えました。そして光あふれる広場で紙芝居を演じる人々や、夏の紙芝居フェスティバルで、みんなが紙芝居を楽しむ様子を写した写真をたくさん送ってくださいました。イタリアのヴェネツィアのすぐ東側にある、まだ見ぬ国スロベニアへの憧れの思いは、わたしの中で日に日に募っていきました。

そして昨年の夏に、イゴールさんがひとりで再来日されました。二〇一八年五月、スロベニアの首都リュブリャナで、紙芝居の国際シンポジウムを開くから、ぜひ童心社からひとり、紙芝居文化の会

毎年夏に紙芝居フェスティバルを開いている
ピランの広場

